

# 北野廃寺発掘調査概報

昭和61年度

京 都 市 文 化 観 光 局  
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

## 序

千年の歴史にはぐくまれた学問，芸術，文化，宗教の都であることをふまえながら，21世紀へ向けての理想のまちづくりを目指している京都は，伝統を生かし創造をつづける都市づくりに取り組み，なかでも，2年後(昭和64年)の市政100周年事業並びに7年後(昭和69年)の平安建都1200年事業などを計画しております。

一方，都市の活性化に伴う開発に際して，埋蔵文化財を保存し，良好な環境を維持することが重要な課題となっております。

このような状況の中で，本市といたしましては，埋蔵文化財の保存について，市民の理解と協力を得る努力をいたしておりますが，保存が困難な遺跡につきましては，調査を行いその成果をできる限り後世に伝えるように努めております。

この調査報告書は，昭和61年度国庫補助事業として実施した調査の概要をまとめたものであり，本書が埋蔵文化財の研究に，また有用な資料として御活用いただければ幸いです。

本調査の実施にあたり調査を受託された財団法人京都市埋蔵文化財研究所，また御指導いただいた文化庁をはじめ御協力をいただいた関係各位並びに市民のみなさまに心から感謝の意を表します。

昭和62年3月

京都市文化観光局

## 例 言

1. 本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託して実施した、文化庁国庫補助を伴う昭和61年度の北野廃寺発掘調査概要報告である。
2. 発掘調査は2ヶ所実施した。発掘調査次数は、第10次・第11次調査である。調査地は以下のとおりである。
  - I 第10次 京都市北区北野紅梅町49
  - II 第11次 京都市北区北野下白梅町39
3. 発掘調査の担当者と調査参加者は以下のとおりである。

第10次 鈴木久男 吉崎伸  
第11次 本弥八郎 木下保明  
調査補助員 藤野彦之・夏原三郎・山田米蔵・牟田嘉孝・角村幹雄・東洋一  
永田宗秀・中津宏典・堀内寛昭
4. 本書の執筆は以下のとおりである。
  - I 第10次：鈴木
  - II 第11次：本・木下
5. 写真は遺構の一部を除き牛嶋茂が行い、一部村井信也が担当した。
6. 図中に使用した方位・座標は、新平面直角座標系（VI）による。
7. 標高はTP（東京湾平均海面高度）を用いた。
8. 文章および断面図の土壌の色名は農林省農林水産技術会議事務局の監修による新版標準土色帖を用いた。
9. 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所の方法に基づき使用した。
10. 本書に使用した位置図は、京都市都市計画局発行の2500分の1の地図（花園）を調整使用した。

# 本文目次

## I 第10次発掘調査

1. 調査経過	1
2. 遺構	1
3. 遺物	5
4. まとめ	7

## II 第11次発掘調査

1. 調査経過	8
2. 遺構	8
3. 遺物	12
4. まとめ	15

## 図版目次

- 図版一 遺跡 調査位置図 (1:2500)
- 図版二 遺跡 第10次調査 1. 調査区全景 (北から) 2. 溝1完掘状況 (東から)
- 図版三 遺跡 第10次調査 1. 竪穴住居跡5 (西から) 2. 竪穴住居跡6 (北から)
- 図版四 遺物 第10次調査 出土土器
- 図版五 遺跡 第11次調査 1. 瓦溜り (南から) 2. 調査区全景 (北から)
- 図版六 遺跡 第11次調査 1. 土壇 (北から) 2. 土壇・敷石部 (北から)  
3. S X43 (西から)
- 図版七 遺物 第11次調査 軒丸瓦・軒平瓦実測拓影図
- 図版八 遺物 第11次調査 軒丸瓦・軒平瓦
- 図版九 遺物 第11次調査 出土土器

## 挿図目次

- 図1 東壁断面図……………1
- 図2 竪穴住居跡実測図……………2
- 図3 遺構実測図 (奈良～平安時代) ……3
- 図4 遺構実測図 (飛鳥時代) ……4
- 図5 遺物実測図……………5
- 図6 遺物実測図……………6
- 図7 土壇・敷石部実測図……………10
- 図8 遺構実測図……………10～11
- 図9 土壇断面図 (X-108, 293, 3ライン) ……11
- 図10 遺物実測図……………13

# I 第10次発掘調査

## 1 調査経過

調査地は、京都市北区北野紅梅町に位置する。建設工事に先だって実施した試掘調査では、平安時代の土壌や鎌倉・室町時代の遺構を多数検出した。検討した結果、検出したこれらの遺構は、北野廃寺に関係する可能性が極めて高いため、発掘調査を実施するはこびとなった。

調査区は、当初逆L字形に設定したが、調査の進展にともなって調査区の南端部を東へ細長く拡張したため、結果的に逆コ字形になった。調査区内には、旧建物の基礎や配管がいたるところに残っていたため、重機を導入してこれを撤去しながら掘り下げた。

## 2 遺構

調査区及びその周辺部は、北から南へゆるやかに下がる傾斜地である。このため、地山及びその他の土層も地形に左右されている。

調査区内の、基本層序は以下のようなものである。調査地全体に、近・現代の遺物を含む層が厚さ40cm前後にわたって認められる。その下には、灰黄褐色砂泥層や灰褐色砂泥層・褐色砂泥層が10cm前後堆積している。灰黄褐色砂泥層・褐色砂泥層は、南は厚く堆積し、北にゆくにしたがって徐々に薄くなり認められなくなる。更にその下層には黒褐色砂泥層が堆積している。中世の遺構は、灰黄褐色砂泥層を除去した段階で検出できる。奈良時代・平

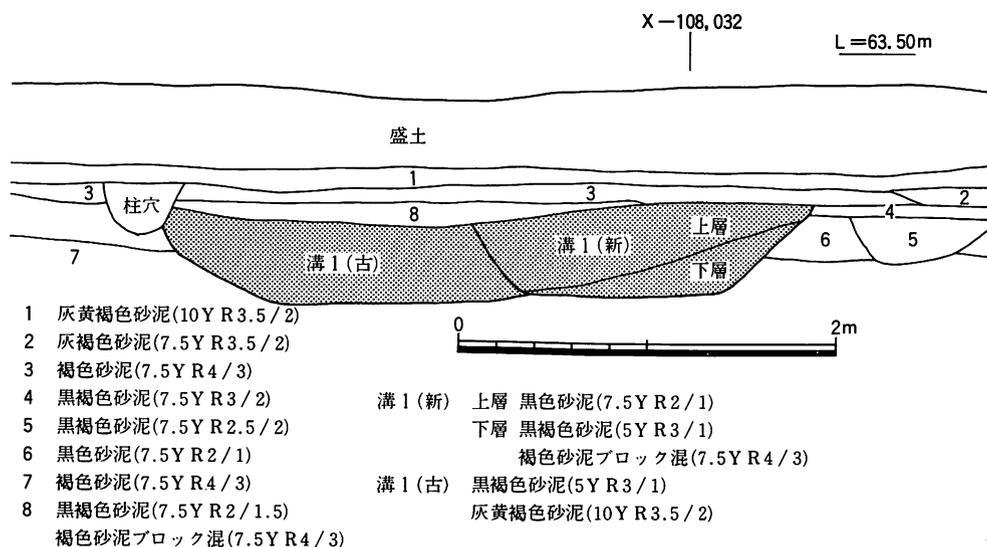


図1 東壁断面図

安時代の遺構は黒褐色砂泥層下で発見できる。

次に、調査の結果検出した主な遺構は、飛鳥時代の竪穴住居跡や奈良時代・平安時代の溝跡・掘立柱建物跡・中世の柵列跡や集石状の遺構などがある。

溝1 東西方向の溝で新旧2時期にわけられる。新しい時期の溝は幅1.9m、深さ0.5mをはかる。一部南側肩口に石積みの護岸が認められた。古い段階の溝は幅2.5m、深さ0.6mで護岸の痕跡は認められず素掘りである。

溝2 南北方向の溝で幅1.4m、深さ0.3mをはかる。護岸した痕跡はなく素掘りである。溝の底部は北に高く、南へ徐々に傾斜する。

建物3 掘立柱建物の北東隅と考えられるものである。掘形は一辺0.7mをはかる方形である。深さは0.3mほどしか残存していなかった。柱間は2.6mをはかる。柱筋のふれは溝2と同様である。

柵列4 東西方向の柵列で西端は、南へ2間ほど直角に折れ曲がる。柱間は、東西方向で約1.8m、南北では1.6mをはかる。

柵列5 東西方向の柵列と考えられる柱列である。柱列のふれは、他の柵列や溝とは全く異なる。

竪穴住居跡6 隅丸方形の住居跡で一辺約4mをはかる。北辺部中央の床面に焼土が認められただけで、カマドは検出できなかった。

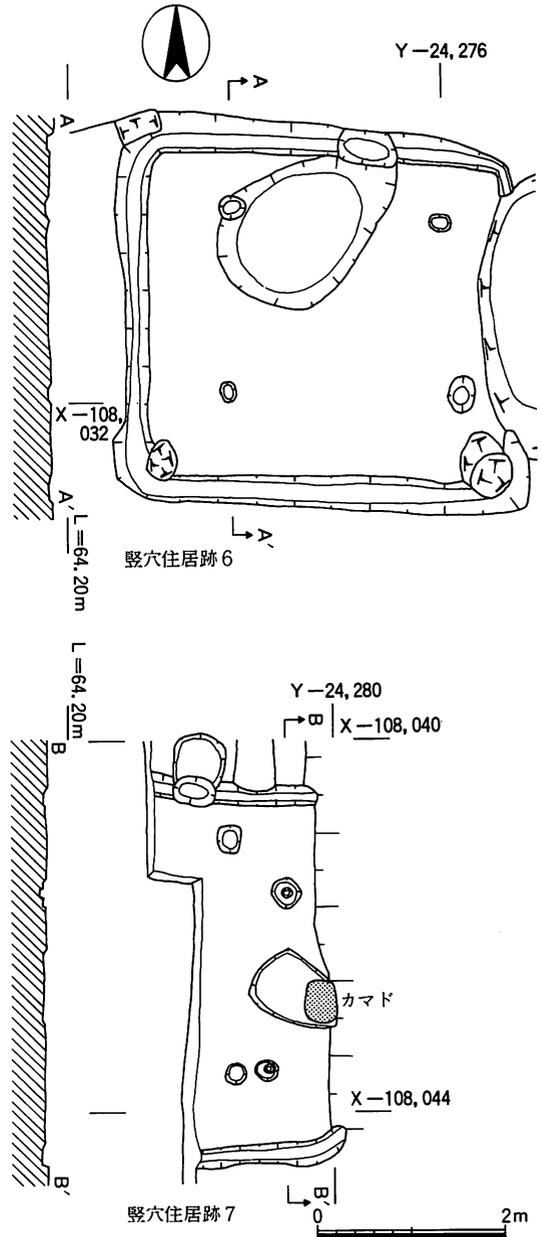


図2 竪穴住居跡実測図

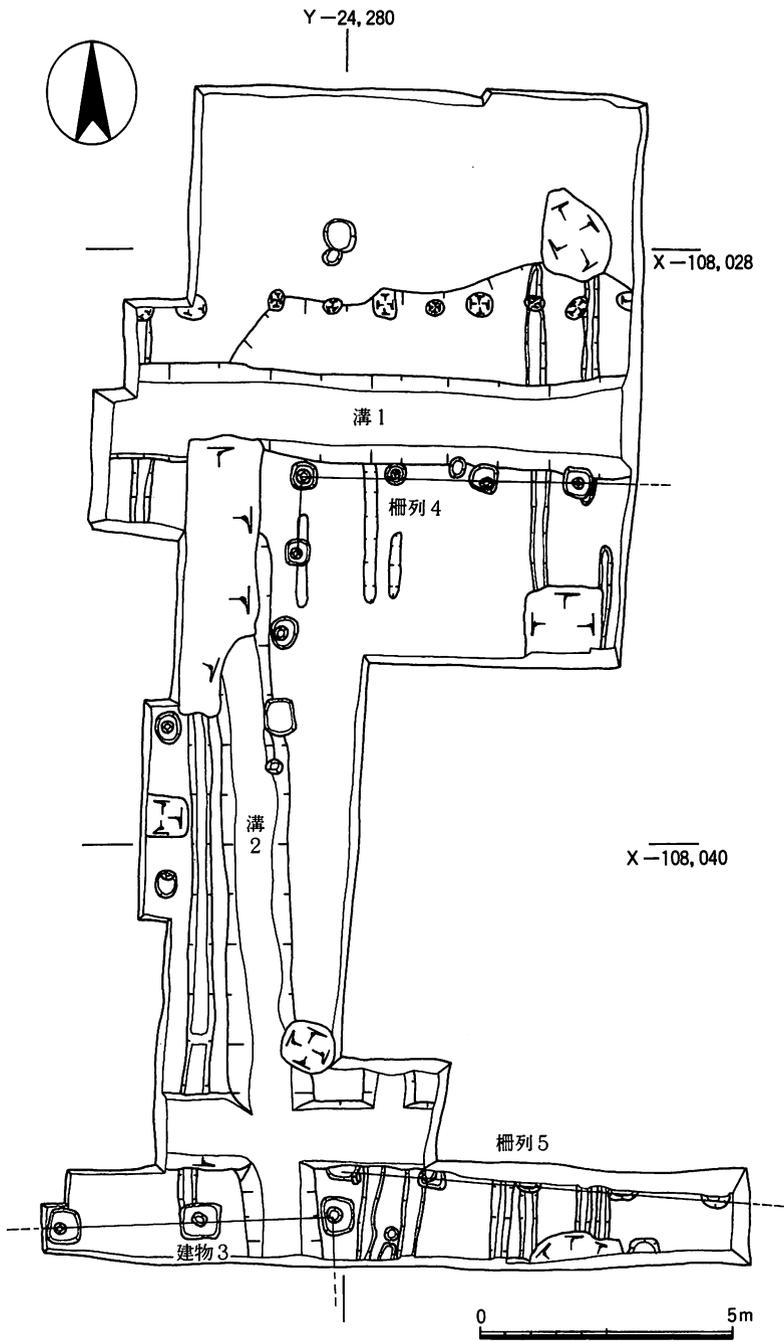


図 3 遺構実測図 (奈良~平安時代)

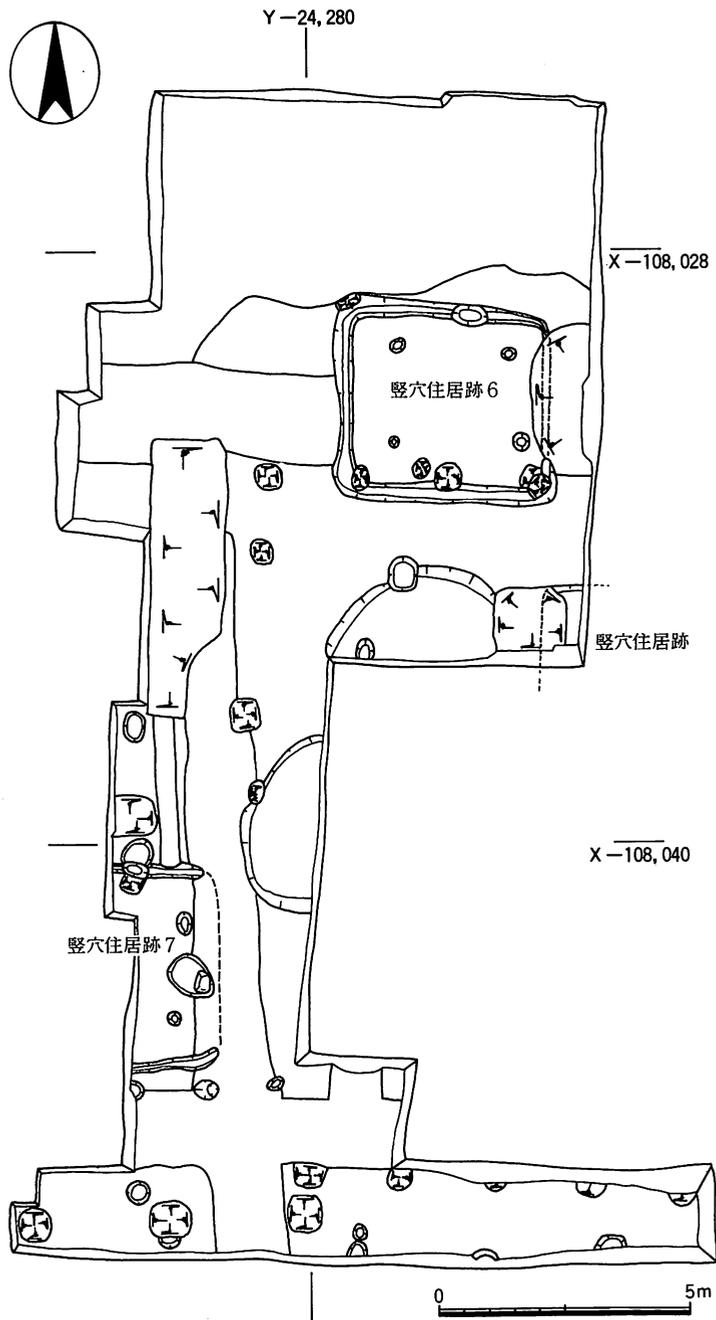


図4 遺構実測図（飛鳥時代）

竪穴住居跡7 住居跡の半分は調査区外にあたる。検出したのは、南北4mをはかる住居跡の東半部である。

床面にはカマドの基底部分一部残存していた。このカマドの焚口は西向きである。

### 3 遺物

出土した遺物は、飛鳥時代の土師器、須恵器をはじめとして、平安時代から室町時代までの土器や瓦などがある。以下、主なものについてのみ述べる。

溝1出土の土器(図6、1~8) 須恵器の杯は高台の付くものとそうでないものがある。杯の1~4は、直線的に外反する口縁部をもつもので、底部は平底である。底部外面はヘラ切りのままで、削りなどは加えておらず未調整のままである。杯5は低い高台をもつが底部外面はヘラ切りのままである。杯6は、体部は直線的にたちあがり、口縁部はそれより若干外反する。口径に比べて器高が高い。高台は高く外側にふんばる。底部外面は丁寧になでを施す。杯蓋7は、頂部は平担で端部は下方に短く折れ曲がる。つまみは低く平担である。頂部はかるくヘラ削りを施す。土師器の甕8は、口縁部が外反し口縁端部は平担で、上下に突出する。体部内外面ともハケメを施しているが、内面の原体は異なる。

溝2出土の土器(図6、9~13) 須恵器杯9は口縁部が外反し底部は平底である。底部外面はヘラ切りのままである。杯蓋10は、頂部は平担で、つまみは付かない。口縁部は短かく屈曲する。緑釉陶器碗12は、体部は丸味をもってたちあがり、口縁部上半は外反する。調整が丁寧なためヘラ削りは底部から体部下半にかけて認められるだけである。内外面とも施釉前にミガキを施す。施釉は全面に施している。底部外面のヘラ記号は焼成まえのものである。11は須恵器の小型壺で、底部外面には糸切り痕を残す。土師器甕13は、口縁部は短く外反し、端部は肥厚する。底部から体部には平行叩きが認められる。内面はオサエの後にナデを施す。

この他、竪穴住居跡から出土した遺物に図5がある。17・18は竪穴住居跡6出土である。17は土師器の杯で、内面には放射状暗文を施す。底部外面の調整は丁寧である。18は、受部の退化した須恵器の杯で、底部外面はヘラ削りのままである。19は竪穴住居跡7から出土した須恵器の杯である。他に溝2から出土した20もある。

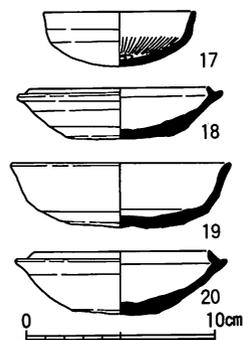


図5 遺物実測図

瓦類(図6、14~16) 瓦は、調査区全体から出土したが軒瓦は少なく2点である。他に、鷗尾片が1点出土している。14はいわゆる北野廃寺式と呼ばれる山田寺系の軒丸瓦である。

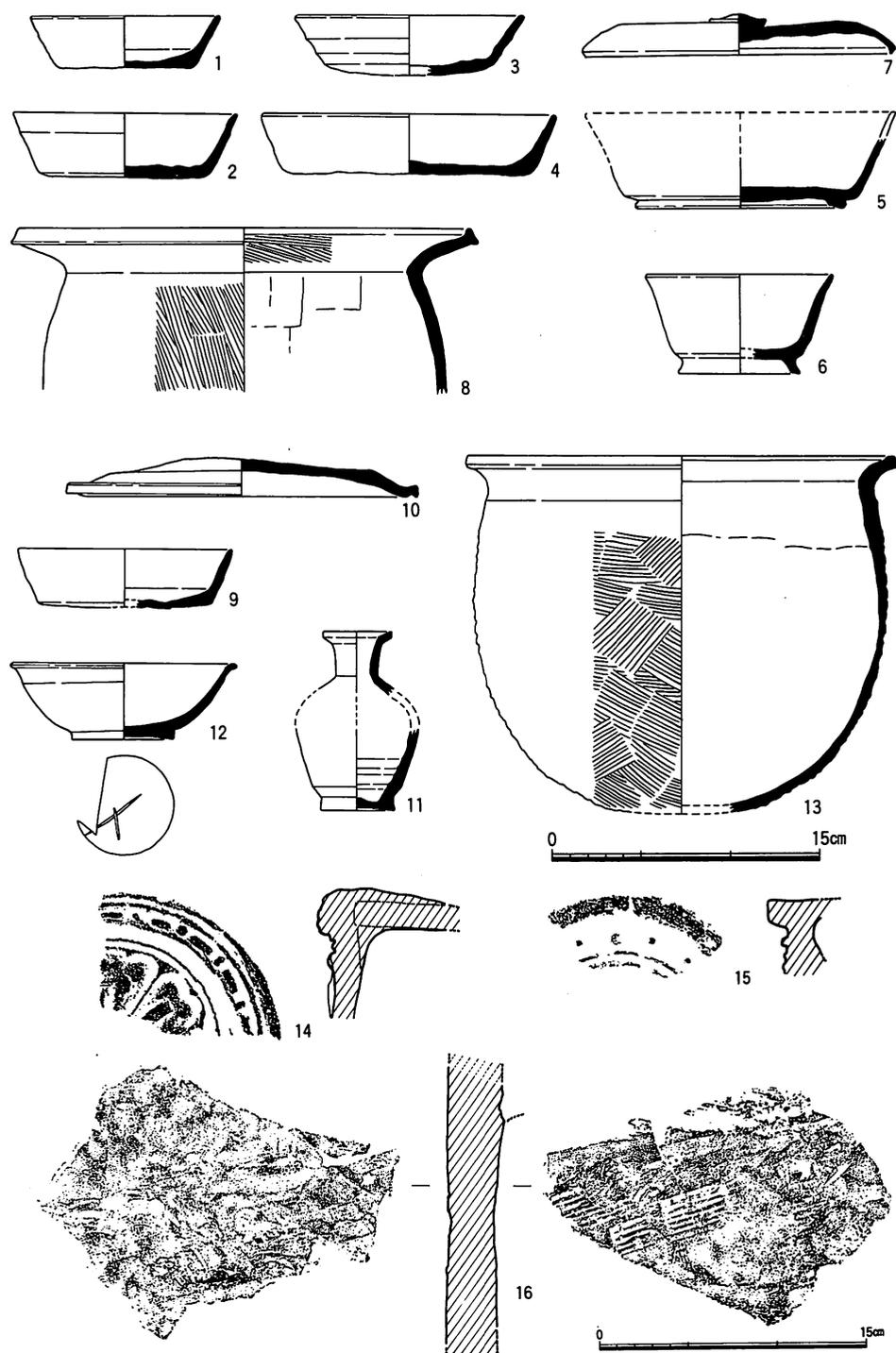


图6 遗物实测图

瓦当部は薄く仕上げられているが、焼成は悪く軟質である。15は西賀茂瓦窯で生産された複弁蓮華文と考えられる。胎土中には砂粒が多く含まれる。16は鷗尾の鱗部の破片である。外面には、須恵器にあるような格子叩きの痕跡を残している。

#### 4 まとめ

今回の調査で検出した遺構は、おおよそ3期に分けられる。まず、北野廃寺が創建され始めた頃の遺構には、竪穴住居跡がある。竪穴住居跡内からは瓦片が出土しており、北野廃寺が創建され始めた当初はまだ、当地には竪穴住居跡が営まれていた。同様の竪穴住居跡は、他に第7次調査などでも検出している。その後、集落の一部は寺院造営の進展にともなって寺域の中にとりこまれていく。

奈良・平安時代の遺構すなわち、北野廃寺及び野寺常住寺跡に関係する遺構は、溝1・2、建物3などがある。溝1は、方向や規模、周辺部で実施した広域立会調査の成果などから、北野廃寺の北を限る溝である可能性が極めて高い。例えば、昭和57年度に行った立会調査では、溝1の南側には土壌や土器・瓦などの分布が認められたが、溝を境にしてその北側ではほとんど発見されていない。また、今回の調査では、奈良時代と考えられる軒瓦や丸・平瓦、鷗尾などが出土していることから、奈良時代には寺城北辺の一部であったことがわかる。この他に、包含層中からは「野」と墨書した平安時代の土師器が出土しており、平安時代の遺物が出土した溝2は、野寺常住寺に関係する遺構であることは確実である。この溝も溝1より北へ延びておらず、先の推定を裏付けている。柵列は野寺常住寺が廃絶してから以降のものである。最後に、北野廃寺及び野寺常住寺の寺域を示すと思われる溝を過去数例検出しているが、まとまっておらず今後の調査・検討がいそがれる。

## Ⅱ 第11次発掘調査

### 1 調査経過

調査地は北野白梅町交差点の南西部に位置している。当地は山城国の古代寺院の一つである北野廃寺の推定範囲にあたっており、付近の調査で多くの遺構・遺物が検出されている。とくに、当地と道を挟んだすぐ北隣りで昭和54年度に実施された第7次発掘調査では、古墳時代の竪穴住居跡、飛鳥時代から平安時代に営まれた瓦窯8基、平安時代の掘立柱建物・溝・土壙、室町時代の掘立柱建物・溝・土壙・井戸など多数の遺構を検出している。

当地に店舗付のマンションの建設が計画され、工事の掘削深度などからみて遺構が破壊される恐れが生じた。そのため、遺構の残存状態を確認するために先づ試掘調査を実施することになった。その結果、柱列・土壙・溝などを検出し、遺構の残存状態が良好であることが判明した。とくに焼瓦を含む焼土面には窯体の一部と思われる破片が含まれており瓦窯の一部ではないかと考えられた。このため、原因者と京都市埋蔵文化財調査センターとの間で協議が行われ、発掘調査として継続して調査が実施されることになり、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けてこれを実施した。

調査は敷地の中央やや西側に南北に細長いトレンチを設置し、近代以降の盛土層を重機で除去することから始めた。調査を進めていく中で、瓦窯ではないかと思われた焼土面は二次的な堆積層（整地層）であることが分かった。しかし、調査区中央部東壁沿いで新たに立石を含む敷石を検出した。この敷石の拡がりや性格をつかむために当初の調査区の調査終了後、東北部に拡張区を設けて引き続き調査した。したがって写真撮影と平面実測は当初の調査区と拡張区で別々に行った。

### 2 遺構

検出された主な遺構は平安時代以前の自然流路・土壙、平安時代の土壇・瓦溜り、室町時代の溝・土壙・柵である。

基本層序 調査区の地表は南に向けて緩かに傾斜しており、下部の堆積層も調査区の北と南では20～30cm程度の高低差がある。調査区の層序は一様ではなく、東部・南部では中世以降の削平が深く、平安時代の遺構の残りはよくない。比較的整った堆積をみせる調査区の北壁での基本層序は次の通りである。近・現代の盛土層が30cm、以下黒褐色泥砂層（10YR3/2）15cm、黒褐色砂泥層（7.5YR3/2）10cm、暗褐色砂泥層（7.5YR3/3）15cmの順に堆積する。次に瓦と焼土を多く含む灰橙色砂泥層（7.5YR6/4）8cmが堆積する。この

層は調査区北半部のみでみられ、南部ではほとんどみられない。次に整地層と考えられる固くしまった暗褐色砂泥層（10YR3/3）15cmがある。この層も瓦と焼土が多少含まれており、上面は部分的に火を受けて赤変している所がみられる。それより下層は調査区の大部分をしめる自然流路の堆積となるが、それ以外の所では基本的には黄褐色砂泥層の無遺物層となる。

S D 16（自然流路） 調査区中央部で平安時代の整地層下面より検出された。流路は北西から南東方向に流れる。計測できる最大幅は約8m、肩口よりの深さは約1.2m以上ある。流路内の堆積層は20以上に分れ、上面から0.5mの深さまでは黒褐色系の砂泥層で平安時代に埋められ整地された層だと思われる。それより下層は砂と礫の互層となる。出土遺物には飛鳥時代の軒瓦・土師器・須恵器・二彩陶器、平安時代の瓦・土師器・須恵器などがある。なお、流路はさらに深くなるが、ビル建築に支障がある為、一定の深さに止めた。

S X 43 無遺物層である黄褐色砂泥層上面より検出された。遺構の形状は溝状を呈し、北壁から東壁に向けて弯曲して延びる。幅は0.6～1.5m、深さ0.15～0.55mで北西部が浅く東にむけて深くなる。なお、東側の溝がくびれて浅くなる所に、長径40cmの河原石が上面を揃えて3個並べて置かれている。遺構内の埋土は、西半部の浅い所では灰褐色砂泥の一層で、東半部では4層に分けられる。東半部の各層には焼土・炭・鉄滓以外のものはほとんど含まれていない。出土遺物は鉄滓が主で、飛鳥時代の瓦・土師器の小片がわずかにある。

瓦溜り（焼土層） 調査区北半部の整地層上面で検出された。この堆積層から焼土と多量の瓦が検出された。瓦の集中する範囲は南北8m、東西4mの間で、とくに北壁沿いに多くさらに北の調査区外へ続いている。堆積層の厚さは5～10cmである。出土した瓦は2次的に火を受けた小破片がほとんどで完形となるものはなく、この堆積層は寺院の火災によって出た廃棄物である瓦・焼土などを整地目的に敷いたと考えられる。出土遺物は瓦以外では平安時代の須恵器・土師器がわずかにあるだけである。

土壇 調査区の東壁に沿って検出された南北方向の土壇である。西肩部のみの検出で、肩口には補強のために自然石が据えられ、その下には雨落ちとみられる小石敷がみられる。土壇の高さは12～18cmである。検出された土壇の南北長は、段差が認められる部分で6.9mで、段差が認められないが小石敷が残存する部分を土壇の延長と考えるなら、調査区の南北長20mを越える。土壇の東西幅は、東壁下で土壇の盛土がわずかに認められることから、3.6m以上ありさらに東側の調査区外に延びる。なお、壇上の施設については上面に敷かれ

た河原石が一部残存するが、大部分は室町時代の溝によって破壊されており明確ではない。

土壇に使用されている石のほとんどが河原石で、なかに割石がわずかに混っている。肩口に据えられた石は西に面をそろえ、小さな石は一部二段に重ねられているが、全体的には一段で構築されている。石の大きさは不揃いで、大きい石は長径30cm前後、小さな石は10cm前後である。土壇下に敷かれた石は径10cm前後でその隙間をさらに小さな石で埋める。石の並びは不規則である。この石敷は雨落ち的性格をもつものと思われる。土壇上面の敷石の残りは悪く、かなりまばらである。なお、土壇北端の肩口の石の標高は58.74mで、南端との高低差は20cmあり、途中やや下方にカーブしながら石列は南に向けて緩やかに傾斜する。石列の方位は北より3度強西にふれている。

土壇の構築法は、断割りにより簡略な版築と判明した。土壇の基盤は、北側では地山の黄褐色砂泥で、南側では自然流路内の埋土となる。南側の版築の堆積土を下から記述すると、まづ砂の多い黄褐色泥砂層10cm、黒褐色砂泥層6cmが土壇と雨落ちの下にわたって積まれ、次いで土壇部分のみに粗砂を含む暗灰褐色泥砂層5cm、雨落ちの下に小礫・砂で固めた灰褐色泥砂層3cm、褐色砂泥層5cmがあ

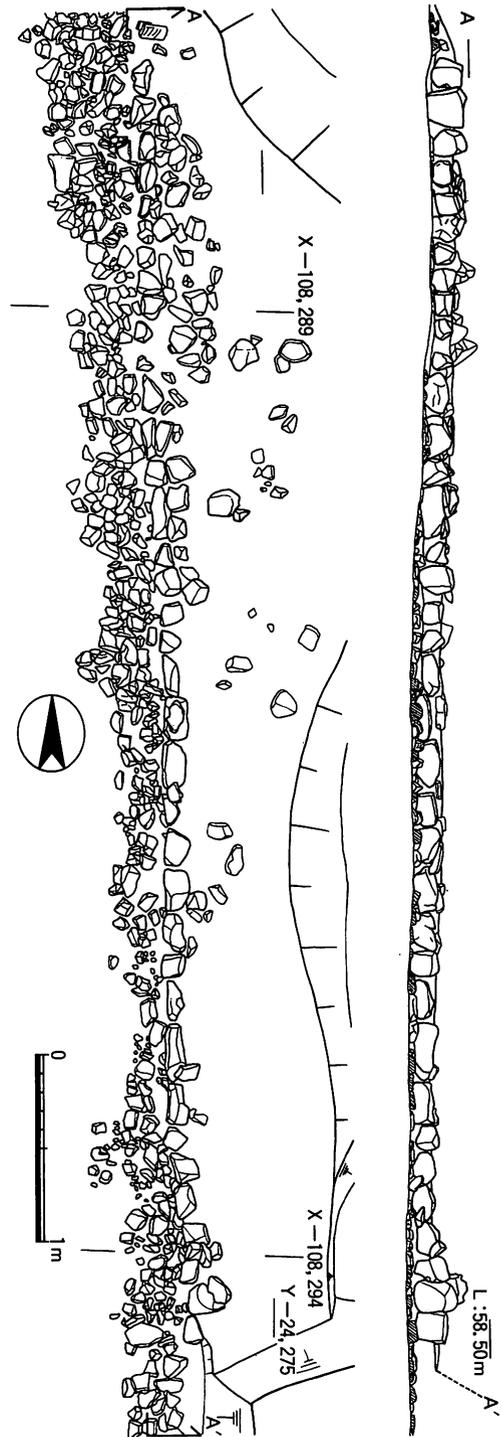
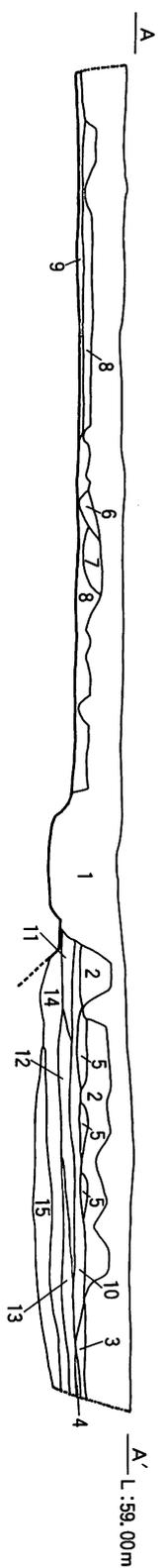
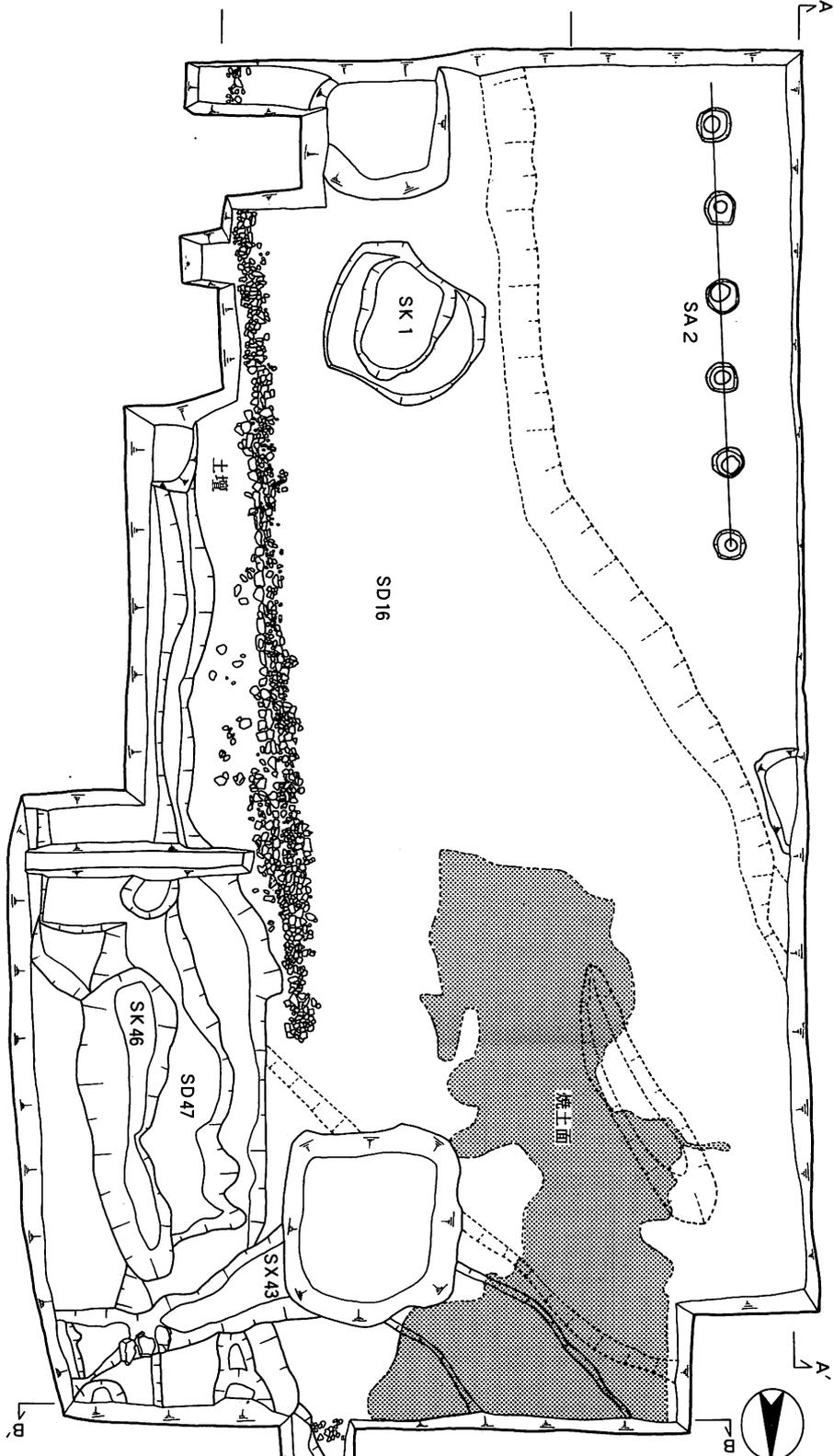


図7 土壇・敷石部実測図



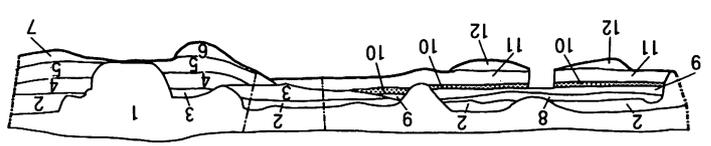
X-108,290

X-108,280



Y-24,280

Y-24,285



B L: 59.00m

- 北壁
- 1 黒褐色泥砂10YR3/1
  - 2 黒褐色泥砂10YR3/2
  - 3 灰黄褐色泥砂10YR4/2
  - 4 黒褐色泥砂7.5YR3/2
  - 5 黒褐色泥砂7.5YR3/2(炭・焼土)
  - 6 褐灰色砂泥7.5YR4/1
  - 7 赤褐色砂泥5YR4/3(焼土)
  - 8 黒褐色砂泥7.5YR3/2
  - 9 暗褐色砂泥7.5YR3/3
  - 10 灰とう色砂泥7.5YR6/4(瓦・焼土)
  - 11 暗褐色砂泥10YR3/3(整地層)
  - 12 灰褐色砂泥7.5YR4/2(SX34)

- 西壁
- 1 黒褐色泥砂10YR3/1
  - 2 黒褐色泥砂10YR3/2
  - 3 褐灰色砂泥10YR4/1
  - 4 灰黄褐色砂泥10YR4/2(焼土)
  - 5 灰黄褐色砂泥10YR5/2
  - 6 暗褐色砂泥状3/3
  - 7 黒褐色砂泥2.5YR3/2
  - 8 黒褐色砂泥10YR3/2
  - 9 黒褐色砂泥7.5YR3/2
  - 10 暗褐色砂泥10YR3/3(整地層)
  - 11 黑色砂泥2.5YR3/2
  - 12 灰黄褐色粗砂10YR5/2
  - 13 黒褐色泥砂10YR3/1
  - 14 黒褐色砂泥7.5YR2/2
  - 15 灰黄褐色砂泥10YR5/2

図8 遺構実測図

り、その上に雨落ちの小石が敷かれる。つぎに土壇部の端に裏込め石を入れて黒褐色砂泥層5cmを積み、最後に肩口に石を据えて黄褐色砂泥層5cmを積む。以上が南側の状況で、地山の標高が高くなる北側では積まれる土は薄くなる。

出土遺物は、石敷面より検出した平安時代の土師器・須恵器・瓦などがわずかにあり、これらの遺物は土壇の廃絶時を示すものであろう。

S A 2 調査区の南西部で検出された南北方向の柱列で、5間分ある。柱の間隔は約1.2m等間である。掘形の径は約40cmで、形状は方形を若干くずしたような不整形円形を呈する。柱列の方位は北より3度強西にふれる。出土遺物は平安時代の瓦・土師器がわずかにあるが、柱列自体は中世のものと思われる。

S K 46 調査区の北東部で、土壇を掘り込んで形成された土壇である。土壇は南北に長く、形状は不整形である。南北長4.5m、最大幅1.4m、深さ0.6mを測る。埋土からは径20cm前後の河原石が一括投棄された状態で多量に検出された。この石は土壇に使用された河原石と大きさが似る。出土遺物には室町時代の土師器がわずかにある。

S D 47 調査区の東北に沿って検出された南北溝で、土壇を掘り込んで形成されている。検出延長は15mである。溝は何回か掘り直されたとみえ、肩口のライン、底部の形状は複雑に乱れている。最大幅は3.5m、深さは最大0.7mである。埋土は黒褐色系の柔らかい砂泥層で、溝底部の堆積土には焼土が混入する。出土遺物には、室町時代の土師器・磁器・陶器などがある。

S K 1 調査区の南部で検出された土壇で、径約2.3m、深さ0.7mを測る。形状はやや

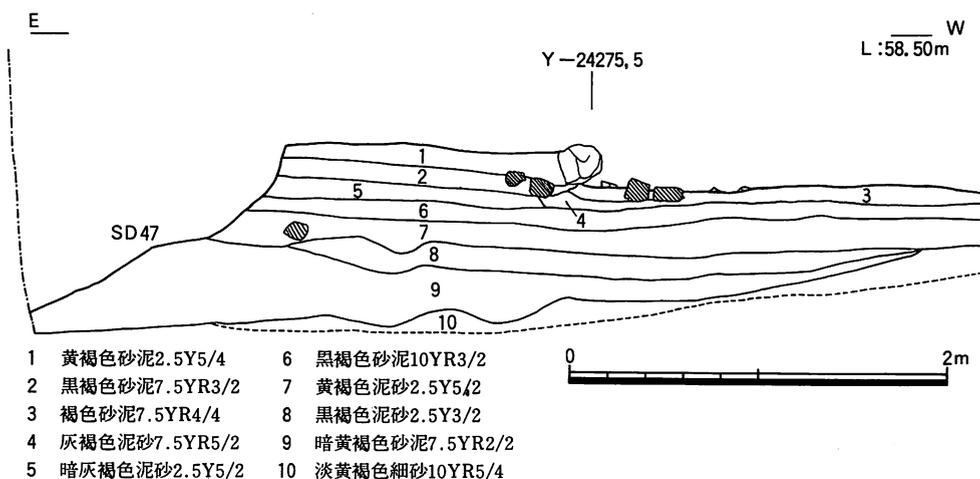


図9 土壇断面図 (X-108293.3ライン)

不整形で、中央が段をなし深くなる。埋土は黒褐色砂泥層で、出土遺物には室町時代の陶器・土師器・瓦質土器がある。

### 3 遺物

出土した遺物の大半は瓦溜りから出土した瓦類で、土器は小片で数も少ない。

土器（図10） 土器には飛鳥～奈良時代の土師器・須恵器・二彩陶器、平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器、室町時代の土師器・瓦質土器などがある。

土師器（1～8・10） 1～6は口径8cm前後の小型の皿である。底部と体部の境は割と明瞭で、口縁部は外上方へ開き端部は丸味をおびる。底部は無調整で、手のひらの圧痕を残すものもある。他はナデ調整を施す。

7は復元口径17.5cm、器高1.7cmの扁平な赤褐色の皿で、口縁端部外方へ若干開き気味で丸味をおびる。底部は無調整で凹凸が激しく一部に指圧痕が残る。他はナデ調整を施す。

8は復元口径19.2cm、器高3.3cmを測る。底部と体部の境は明瞭で外上方へほぼまっすぐのび、口縁端部は丸味をおび内面に一条の沈線をもつ。底部・体部は横方向のヘラ削りを行い、他はナデ調整を施す。

10は小片で口径、立ちあがりの状態などが不明確で、復元では鉢としたが、杯になる可能性もある。外面は横方向、内面は右上りの放射状の暗文を施す。

1～8はS D16の上層、10はS D16の下層から出土

黒色土器（9） 復元口径14.4cmを測る甕である。ほぼ直線的にのびる体部から明瞭な稜をもって『く』の字形に屈曲する口縁部をもち、端部はとがる。体部は横方向のヘラ削り、他はナデ調整を施す。整地層より出土。

須恵器（11～23・30・31） 11は復元口径9.5cmを測る壺の蓋である。平坦な天井部をもち口縁部との境は明瞭である。回転ナデ調整を施す。

12・13は杯の蓋である。復元口径は12が15.8cm、13が15.4cmであるが、12の方が器高が低く扁平である。13は天井部をヘラ削り調整するが、12は無調整である。

14は復元口径11cmの杯身で底部と体部の境は明瞭で、体部・口縁部はまっすぐ外上方へのび、口縁端部は丸味をおびる。底部ヘラ切りそのまま無調整、他は回転ナデ調整を施す。

15は復元口径14.2cm、器高4.5cmを測る杯身である。体部・口縁部は外弯気味に外上方へのび、端部は外方へつまみ出される。底部は粗いヘラ削り、他は回転ナデ調整を施す。

17は断面台形の高台がつく、復元口径14.5cm、器高6.1cmの杯身である。高台は体部と底部の直下に貼り付ける。体部・口縁部はまっすぐ外上方へのび、端部はつまみあげ断面三

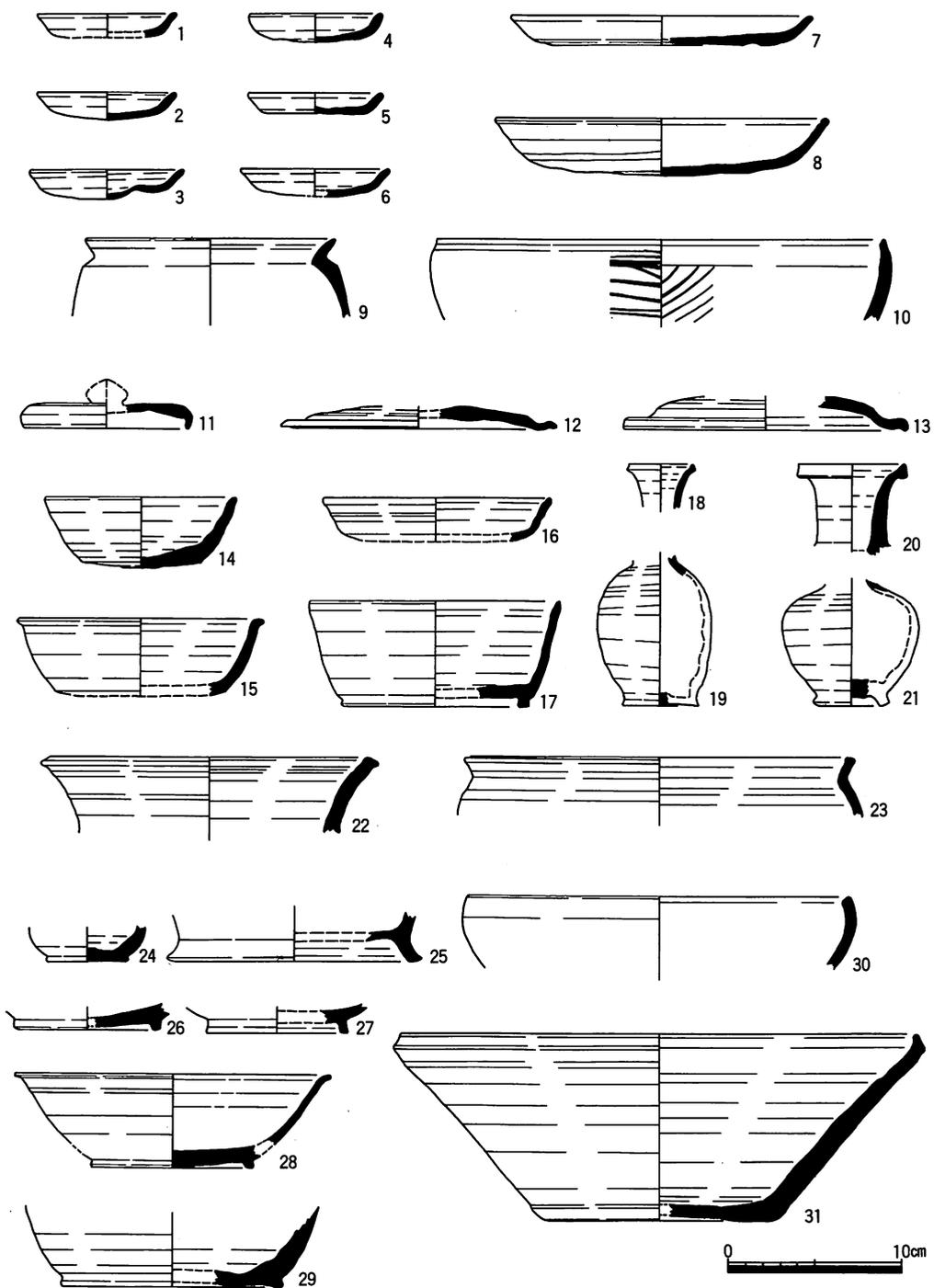


图10 遗物实测图

角形を呈す。底部はヘラ切りのまま無調整、他は回転ナデ調整を施す。

16は復元口径13.2cm、器高2.5cmの皿である。底部・体部の境は明瞭で、口縁端部は軽うつまみあげ、内面に一条の沈線がめぐる。回転ナデ調整を施す。

18は復元口径3.6cmを測る瓶子の口縁部である。端部は内上方にのび断面三角形を呈す。

19は楕円形に近い体部をもつ瓶子である。底部は糸切り、他は回転ナデ調整を施す。

20は復元口径6.0cmの瓶子の口縁部で、外面に自然釉がかかる。回転ナデ調整を施す。

21は断面逆台形の高台が付く瓶子、肩部に最大径をもつ丸味をおびた体部をもつ。回転ナデ調整を施す。

22は復元口径18.3cmの甕で、外反する口縁部をもち端部が外側に突出する。回転ナデ調整を施す。

23は復元口径22.6cmの鉢であるが、小片からの復元のため数値は不正確である。小さく外反する口縁部で、口縁端部は外方に傾斜する面をもつ。回転ナデ調整を施す。

30は復元口径22.2cmの鉄鉢である。口縁部は内弯し、端部は内方へ傾斜する面をもつ。回転ナデ調整を施したのち外面は横方向に密なヘラ磨きをする。

31は復元口径29.8cm、器高11.0cmの鉢である。体部・口縁部はほぼまっすぐ外上方へのび、口縁端部は内上方へのびる。回転ナデ調整を施すが、底部は無調整である。内底面に赤色の顔料が付着している。

31は土壇の肩部に敷かれた石の間から、他はS D 16上層から出土している。

緑釉陶器 (24) 平らな底に球状の胴部をもつ唾壺で、底部を糸切りする。S D 16上層より出土。

二彩陶器 (25) 八の字に外方に開く脚が付く壺である。胎土は土師質で、黄褐色と緑色の釉を斑状に施釉し、無釉部の白色とで三彩の感を呈する。S D 16上層より出土。

灰釉陶器 (26~29) 26・28は断面逆台形の高台をもつ椀で、体部・口縁部は外弯気味に外上方へのび、口縁端部は外方へ開く。28は復元口径18.4cm、器高5.5cmを測る。施釉は内面に限られ、内底面にトテンの痕跡を残す。底部はヘラ切りのまま無調整、体部はヘラ削り、他は回転ナデ調整を施す。

27は細長い短形の高台がつく椀で、回転ナデ調整を施す。内面に施釉している。

29は壺の底部で、平坦な底部の外端面が突き出して体部へと屈曲する。底部はヘラ切りのまま無調整、体部はヘラ削り、内面は回転ナデ調整を施す。

28はS D 16上層・焼土層・土壇下の雨落ち状石敷の各所から破片として出土している。

26・27・29はS D16の中・上層から出土している。

他に室町時代の土器類があるが、今回は図示しなかった。

瓦(図版七) 瓦は、飛鳥時代から平安時代にいたる各時代のものが出土した。以下、主な軒瓦についてその観察を述べる。

単弁10弁蓮華文軒丸瓦(1・2) 飛鳥寺式軒丸瓦で、中房は小さく1+6の蓮子を配する。弁の先端は桜花状を呈する。この2点は同範であるが、瓦当の厚さや成形手法が異なる。1は瓦当部が薄く裏面には刷毛目の調整が認められる。同様な手法は高句麗系の軒丸瓦に見受けられる。2は瓦当部は厚く、瓦当外周を削って仕上げている。1は幡枝窯で、2は北野廃寺瓦窯で生産されたものと考えられる。

単弁10弁蓮華文軒丸瓦(3) 北野廃寺式と呼ばれる山田寺系の軒丸瓦である。中房は小さく蓮子も小粒である。

複弁8弁蓮華文軒丸瓦(4) 中房は大きく1+6の蓮子を配する。焼成は良好であるが、胎土中の砂粒が多く文様の細部はあまり明確でない。

単弁8弁蓮華文軒丸瓦(5) 中房は小さく1+4の蓮子を配する。外区には12の珠文をめぐらす。範の打ち込みは浅く、瓦当面は平坦に近い。瓦当裏面には布目圧痕が認められ、一本造であることが知られる。

均整唐草文軒平瓦(6) いわゆる興福寺式軒平瓦と呼ばれる大型の軒平瓦である。上外区、脇区には横長の珠文をめぐらす。下外区には線鋸齒文を配する。内区は外区より一段低く、各主葉は強く巻き込む。顎は段顎である。北野廃寺瓦窯で生産されたものである。

均整唐草文軒平瓦(7) 中心飾は対向C字形で、西賀茂瓦窯で生産されたものと考えられる。小片であるため詳細は不明である。

その他、北野廃寺瓦窯で生産された興福寺式軒丸瓦や首銘軒平瓦などが出土しているが、小片であるため今回は省略した。

なお、各瓦の出土地点は、3・7が瓦溜り、5が整地層、1・2・4はS D16、6はS D46である。

#### 4 まとめ

今回の調査では、北野廃寺に関する遺構は検出されなかった。検出された遺構の件数も比較的少ない。そのなかでも特に注目されるのは、平安時代の野寺に関連すると考えられる土壇である。遺構の性格は明確でなく、回廊・基壇建物・道路などが考えられる。今回の調査区の北140mで実施された北野廃寺第2次調査で、瓦積基壇が検出されており、今

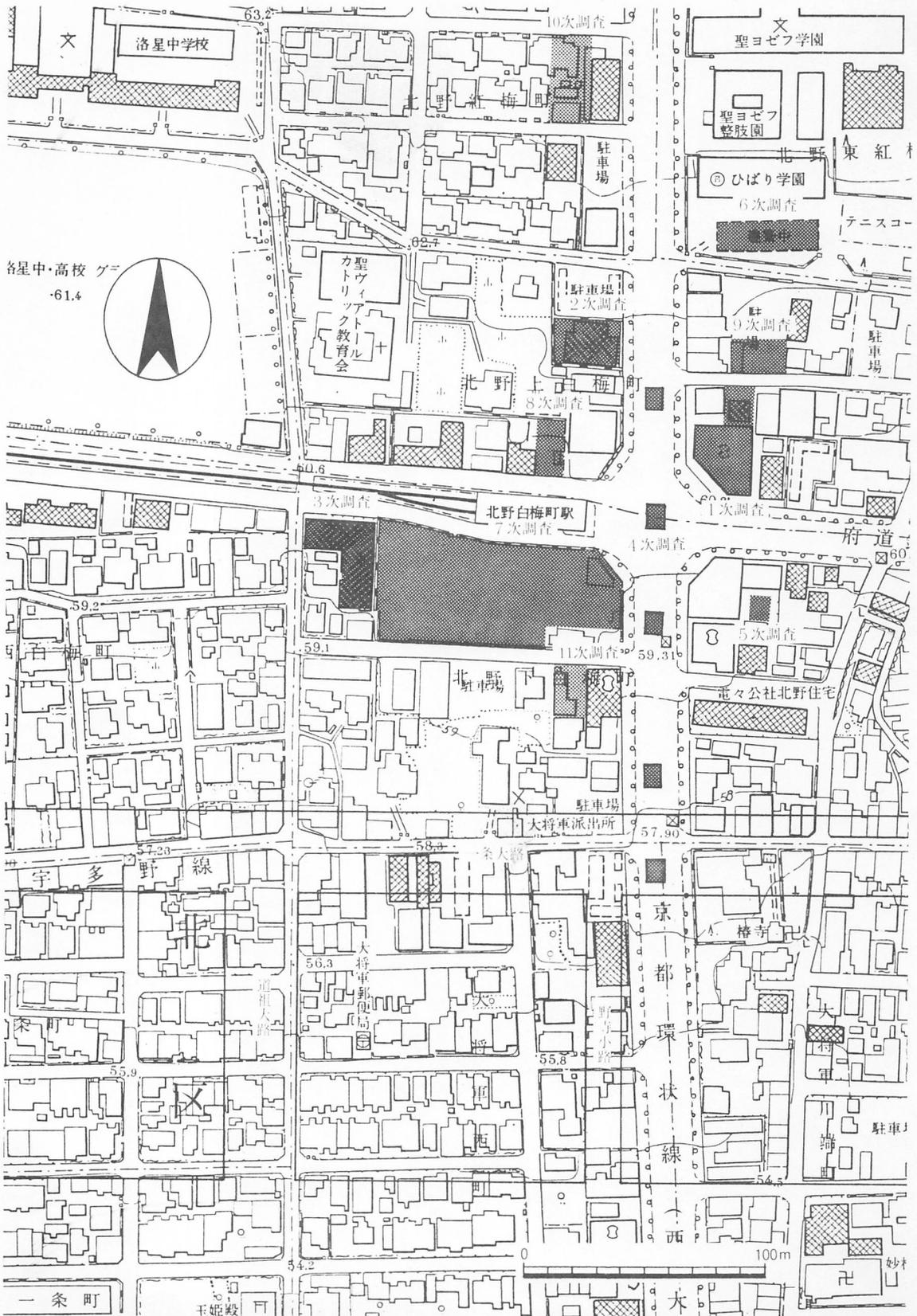
回の土壇西肩ラインを北に延長すると、基壇建物のほぼ中央に至る。しかし、今回の調査区と道路を挟んですぐ北側で実施された北野廃寺第7次調査では、土壇は検出されていない。考えられる理由としては、削平あるいは西へ折れ曲がるなど色々ある。いづれにしても土壇の性格は、さらに慎重な検討と今後の調査をまたなければならない。

土壇の構築時期については、出土遺物がきわめて少ないため明確でない。第2次調査では基壇建物が2度にわたって焼失したことを確認しており、焼失の年代を元慶八年（884）と天慶三年（940）にそれぞれ推定している。今回検出した土壇は火災の痕跡がないが、石敷の上面から9世紀と考えられる土器類が検出されている。又土壇を埋める整地層上面の焼土層からは、平安時代後期まではくぐらなないと考えられる瓦類が出土しており、土壇の年代を考える上で参考となろう。

自然流路は第7次調査で検出されたものの延長である。平安時代には、流路の痕跡である地形の起伏を残していたと考えられ、今回の整地層はその地形を整えるためであったと考えられる。現在の地図上の等高線からも、流路の痕跡がわずかにうかがえる。

室町時代の遺構は今回4例検出された。過去の調査でも掘立柱建物などが多く検出されており、今後さらにこの地域における同時代の調査・研究が必要である。

# 圖 版



洛星中・高校 グレ  
-61.4

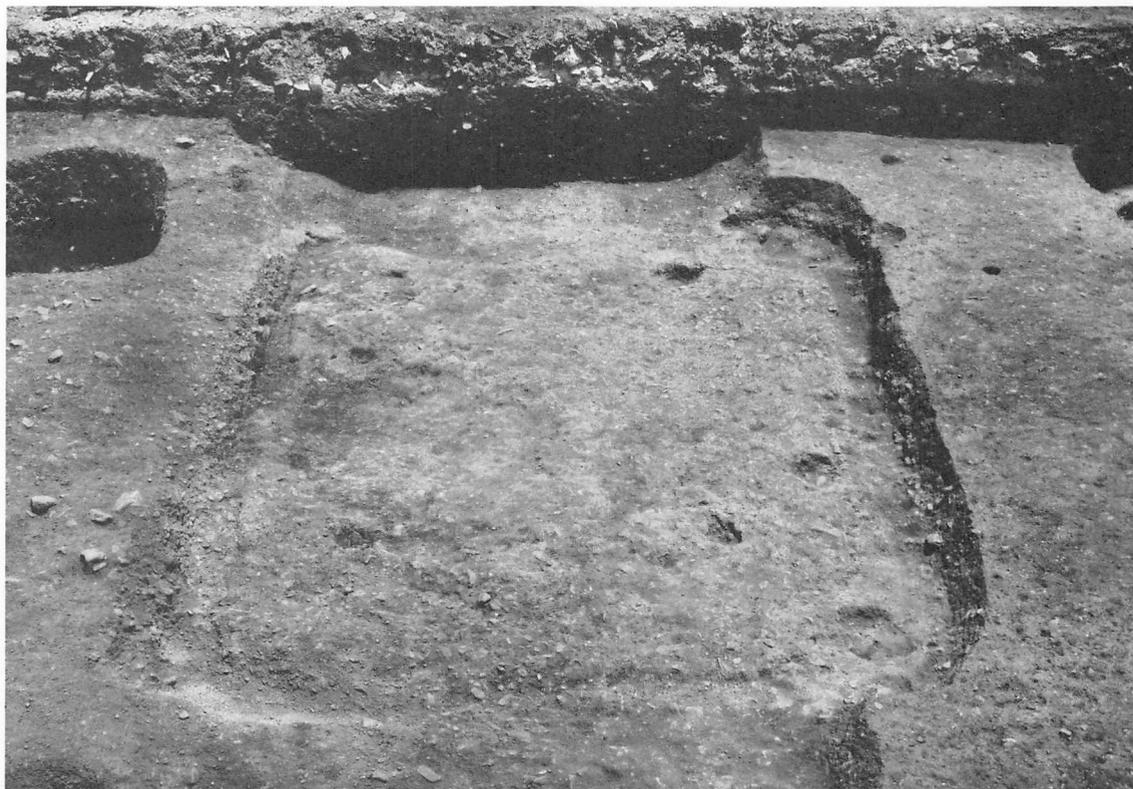
調査位置図 (1:2500)



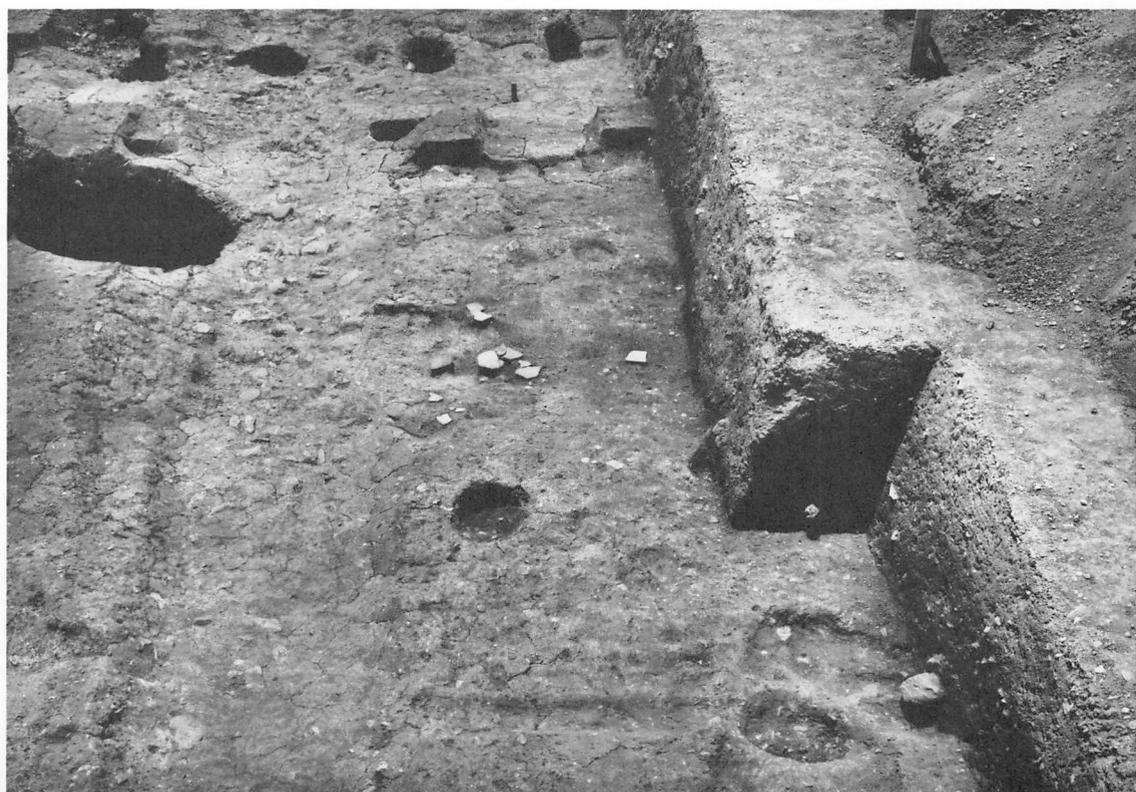
1 調査区全景（北から）



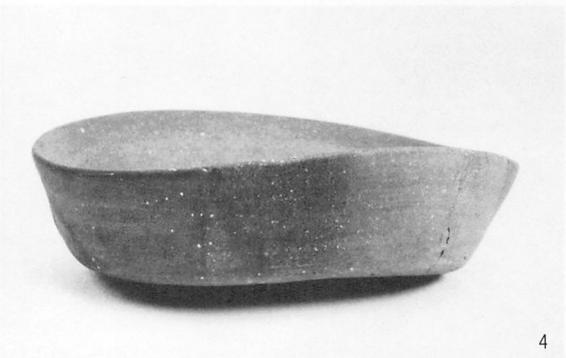
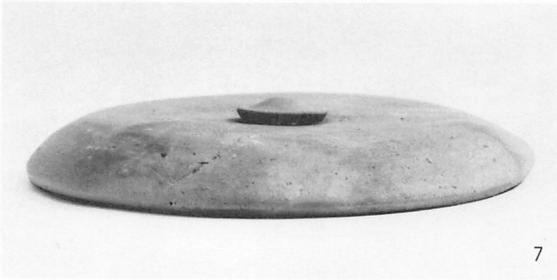
2 溝1完掘状況（東から）



1 竪穴住居跡5 (西から)



2 竪穴住居跡6 (北から)



出土土器



1 瓦溜り (南から)



2 調査区全景 (北から)



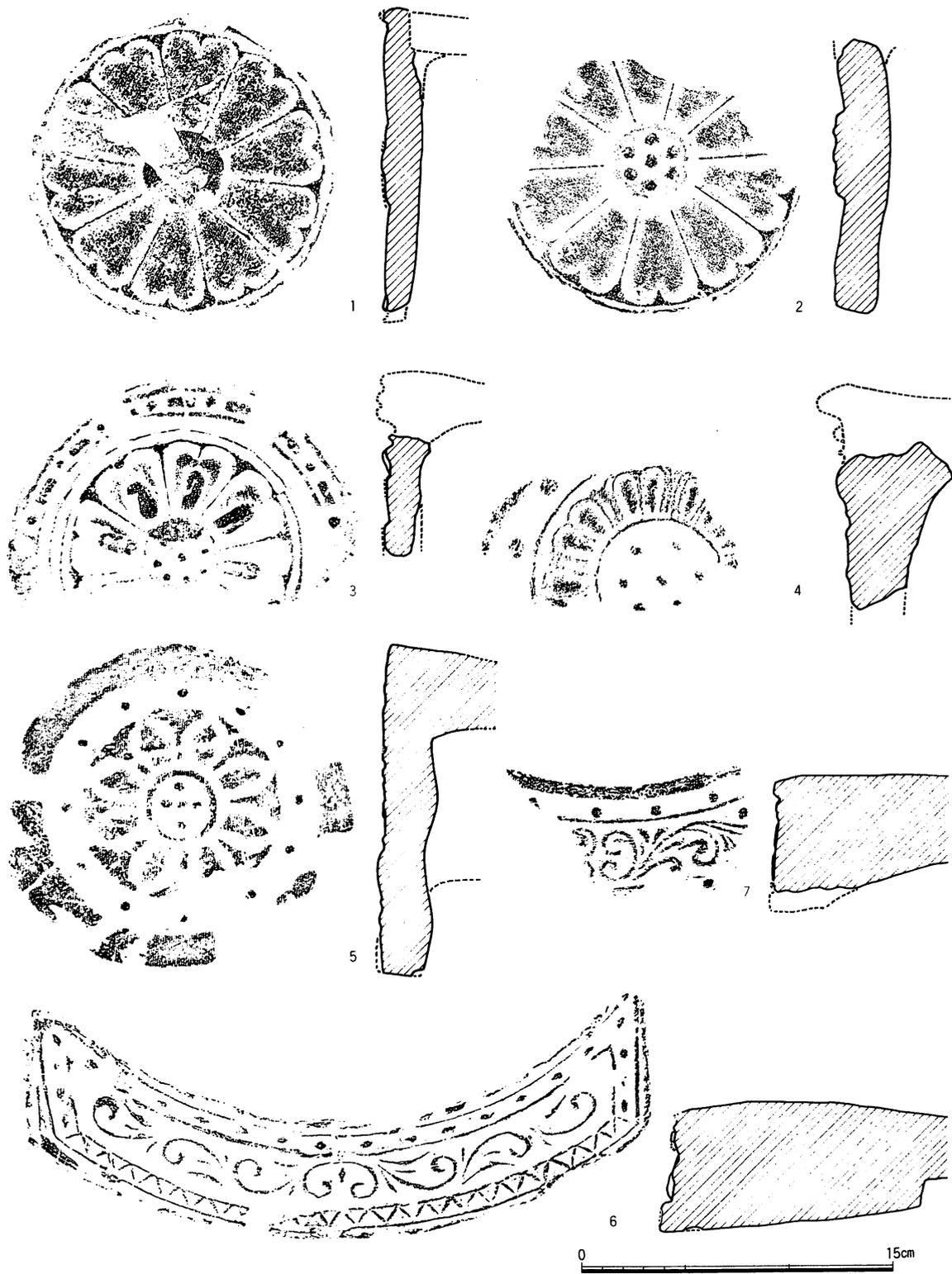
1 土壇 (北から)



2 土壇・敷石部 (北から)



3 S X43 (西から)



軒丸瓦・軒平瓦実測拓影図



1



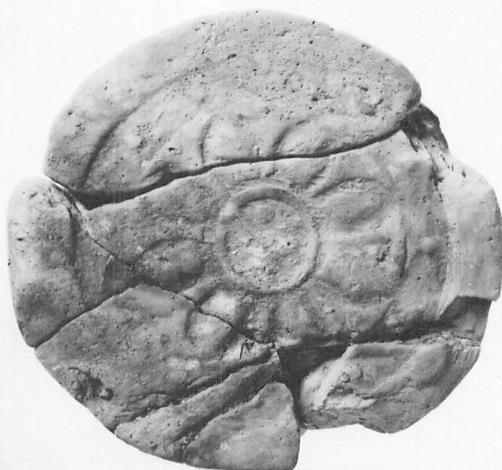
3



2



4



5

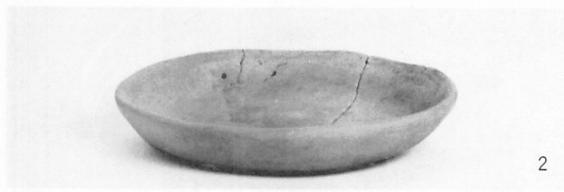


6



7

軒丸瓦・軒平瓦



2



3



4



6



7



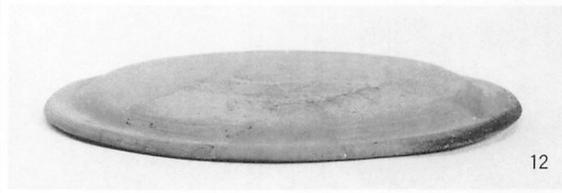
8



30



11



12



13



17



28



31

## 北野麁寺発掘調査概報

昭和61年度

発行日 昭和62年 3月31日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町

TEL (075) 415-0521

印刷 真 陽 社